

遠山景晋の九州紀行

とおやまかげみち

江戸時代には、老若男女を問わず多くの人が全国各地の名所をめぐる物見遊山の旅をしていました。なかでも九州への旅は、当時、外国との貿易を行っていた長崎が中心となっていました。そして、それに匹敵するほどの名所であったのが太宰府でした。太宰府は、長崎街道からほど近いという地の利もさることながら、古代の政庁があったという歴史や、天神信仰の隆盛により天満宮参詣が盛んになることもあり、数多くの人々が訪れていました。あの「篤姫」も嘉永6(1853)年に、天満宮へ参詣しています。

文化元(1804)年、通商を求めて来航したロシア大使レザノフとの交渉のために長崎へ派遣された遠山景晋は、「遠山の金さん」と遠山景元の父)、その時の九州紀行の様子を紀行文『続未曾有記』(板坂耀子校訂「叢書江戸文庫十七

近世紀行集成」)に記しています。12月に江戸を出発した景晋は、京・大阪を経て2月晦日に長崎に到着しました。3月にはレザノフとの交渉を終え(幕府は通商を拒否)、24日、江戸への帰途につきます。その途中の29日に太宰府を訪れ天満宮に参詣しました。当時の太宰府や天満宮についての記述をいくつかみてみましょう。

池に鯉多しといふ、橋三あり。第二は平橋、第一、

太宰府人物志

資料室だより④

第三は反橋、皆板ばし也。東都亀戸は此景か、現未の三橋と云。池中に嶼有。池の形は、心字に象ると云。又「腰鼓の形なり」とも云。老楠数株あり。三はしを渡り、中門、回廊有。本社の前、左に飛梅の古木、柵にて囲たり。

とあり、当時の天満宮にも心字池とそれに架かる過去、現在、未来の三橋があったことがわかります。また、現代の私たちにも馴染みのある大楠に飛梅といった木々についても記されており、当時の天満宮の様子が忍ばれます。

また、このほかに観世音寺や史跡についても次のように記されています。

是より一里東に、観世音寺あり。一字の小刹、僅に名を存る而已。其西に都府楼、大門の礎、方六尺。央より丸柱の象あり。此辺、缺瓦掘出す事あり。

当時の太宰府においても天満宮だけでなく、観世音寺や政庁跡などの史跡が太宰府を訪れた人々に注目されていたことが伺えるでしょう。

このように、太宰府は江戸時代の昔から都府楼の史跡や天満宮などの、歴史と文化に彩られた名所のひとつとして数多くの旅人を迎えていたのでした。後に長崎奉行として、再び長崎を訪れることとなる景晋は天満宮で何を祈ったのでしょうか。